



みはら 玉手箱



平成28年3月27日(日)、三原市教育委員会と三原市文化財協会が主催する「国史跡 高山城跡見学会」が開催されました。この催しには、市民学芸員の「城館体験グループ」のメンバーが、見学会に先立って、史跡や登城道の整備・マップづくりに始まって、当日の解説や見学者の誘導等、全般にわたって大活躍でありました。見学会の様子や、当日の解説内容を城館体験グループがまとめましたので、以下に紹介します。(挿入した写真で、撮影日を記入したものは、今回の見学会以前に別途撮影したものです)

国史跡 高山城跡見学会報告

みはら市民学芸員城館体験グループが解説する高山城跡見学会が、平成28年3月27日(日)10時より開催され、参加者とスタッフ合わせて老若男女70数名が集まりました。

2グループに分かれて晴天の中、高山城跡に向かいました。高山城は、鎌倉・室町時代を通じて小早川氏が本拠とした屈指の山城で、鎌倉初期に小早川4代茂平が築城したと言われています。

高山城は、標高190mの山頂に谷を挟んで南北に分かれており、ピークには曲輪群が配置されていますが、曲輪の構成から考えると南郭が鎌倉・南北朝時代に築かれ、イワオ丸が当時の主郭と思われます。その後、北郭が構築され今の場所が本丸になったようです。

谷の存在によって、城全体としてまとまりに欠けており、近世軍学に言う一城別郭の様相です。

北側のピークは、中心に本丸・二ノ丸(戸石丸)・北ノ丸・扇丸・出丸など、南側のピークには、出丸・南ノ丸・千畳敷(イワオ丸)・権現丸(鷹尾丸)・太鼓丸・西ノ丸などの曲輪群があります。また、南東下に伸びる尾根筋に大掘切があり、城内には7箇所の素掘りの井戸跡があります。

高山城で大きな合戦があったのは、次の3回と思われます。

- (一回目) 最初は南北朝時代で、南朝方山名氏の連合軍から攻撃を受けました。
- (二回目) 応仁・文明の乱では、竹原小早川氏が沼田総領家の高山城を攻めており、落城寸前に追い込まれています。
- (三回目) 天文12(1543)年には、尼子勢が小早川氏の勢力圏に攻め込み、翌年には、尼子勢が高山城を包囲して攻撃しました。

小早川隆景は、天文20(1551)年に高山城に一旦入り、翌年6月には対岸にある副壘の新高山城を改修して移ったことで、総領家の本拠城(高山城)としての役目は終わりました。

登城道は3ルートありますが、今回はみはら市民学芸員城館体験グループが整備したルート(案内板あり)を登ることにしました。

登って行くと最初の遺構、大掘切



〔高山城 H21.1.12作成 市民学芸員 山根光博〕

に着きました。

① 大掘切

掘切とは、城内に敵の侵入を封じる為、尾根上をV字型の空堀で切断した城の防御施設の一部です。この掘切はT字形になっており、間道として利用されていたのではないのでしょうか。南北朝時代の古い城は、城内との境界線の堀は浅かったのです。大掘切から急で滑りやすい道を登ると、左側に深い豎堀と土塁が見えてきました。



土塁と切岸

②-1 土塁と豎堀

出丸と南ノ丸(犬ノ丸)の間にある空堀に着くと、右に腰巻石垣のある土塁があって、出丸から垂直に下がった溝を豎堀といいます。

豎堀とは、行く手を拒む空堀を敵が登ってくると、投石や丸太などを落とし、豎堀の底から這い上がろうとする敵を、弓矢で狙って殲滅させる防御施設です。

土塁の役目は、切岸(矩面のこと)をより高くする為や、土塁を楯にして身を守る為の防御施設です。ここの土塁には、出丸(南ノ丸)への侵入を防ぐ役目があります。



豎堀 H19.10撮影

※土塁には、作り方により、土を盛りながら固めてゆく版築土塁ともう一つは、平面を削除しながら土塁の形にしてゆく削り残し土塁があります。

※土塁の上側の石垣をハチマキ石垣、下側にある石垣を腰巻石垣といいます。

※切岸とは、矩面を60度角に削った斜面で、木などは伐採し登りにくくしたものです。

②-2 南ノ丸(犬ノ丸)

南ノ丸は、別名犬ノ丸といいます。北側下に帯曲輪が存在しており、曲輪の西南隅に石列があり石塁の役目をしており、此の場所から敵に弓矢や槍などで攻撃した防御施設と思われます。

鎌倉・南北朝ころの東側の要であり、標高185.7m で、表土から備前焼の破片が多く見つかっています。

③-1 千畳敷(イワオ丸)

千畳敷は別名イワオ丸といい、鎌倉・南北朝ころ構築された曲輪で、標高190m、広さ東西60m・南北90mあり、築城当時の主郭であったと思われます。

北側には野面積みの石垣が見られ、その下には4壇の曲輪が存在しています。イワオ丸といって大岩が露出しており、岩に3箇所穿った所がありますが、これは、礎石穴(柱穴)で、建物があつた跡と思われます。



H20.4撮影

岩をよく見ると花崗岩の表面が赤色に染まっており、竹原小早川と戦った応仁・文明の乱の時に、建物が焼失したと想像できるのではないのでしょうか。

大岩の北西部に岩を掘り抜いた溜井戸・溜池と思われる遺構があります。

③-2 権現丸(鷹尾丸)

土塁を登って行くと、鎌倉・南北朝のころに構築されたと思われる権現丸に着きます。この曲輪は別名鷹尾丸といい、高山城の中で一番高く、標高190.2mあり、この高所に権現社が祀ってあつたといわれています。ここは、東西65m・南北35mで狭い所が10mの逆三日月形の曲輪です。北東に山桜が一本見えます。

③-3 小曲輪

千畳敷と権現丸の間に一段と低くなった長方形の曲輪があります。東西35m・南北20m余りの広さを有し、南側に削り残し土塁があります。この曲輪の中央から北に下って行くと左右に、石垣が多く見られますが、当時のものではなく、近世の耕作地と思われます。

④ 京屋敷といわれている曲輪（標高 158m）

南郭と北郭の谷間に、京屋敷といわれる曲輪があったと地元の人々の言い伝えがあります。この曲輪に登城道が通っており、船木の堂谷から大手道が通り、真良側に降りる搦手道が江戸時代の絵図に書かれています。

地元の伝承によりますと、

都から移り住んだ人の屋敷があった？

都からの客人の宿舎があった？

将軍家の屋敷を真似て建てた屋敷があった？

等の話が残っています。表土から「かわらけ」や「中国産の磁器」などの欠けらが見つかっています。大杉の下に石積の井戸があり、雨が降ると水が溜まっています。

⑤ 扇ノ丸（標高 186.4m）

高坂・真良側を見渡される要の曲輪です。曲輪の中心部には、池と築山と思われる遺構があり、地元では寺屋敷があったとの言い伝えが残っています。以前、曲輪の下に小さな五輪塔の残欠が1ヶありましたが、今は見当たりません。東下の石垣は、立石を中心に横石を積んでおり、中世の山城に多く見られます。

※吉川館に見られる石垣の積み方とよく似ていますが、石材の大きさや規模が違っており、時代的にも相違します。

扇ノ丸から本丸に上がる途中右側に、深さ1mの素掘りの井戸があります。

⑥ 本丸（標高 185.6m）

この曲輪は、南北朝以降に構築された本丸で、北側に高さ50cmの石垣があります。本丸を囲む石垣は、扇ノ丸と同じ立石で構築されています。この曲輪で、「かわらけ」の破片や刀子・磁器などが表土から見つかっています。

（山桜を見ながら、昼食をとりました）

⑦ 中ノ段

本丸と二ノ丸をつなぐ低い段で、北東の出丸へ行く道と、トヤノ段へ降りる道があるが、今はブッシュ状態になっています。

⑧ 二ノ丸（戸石丸 標高183.4m）

戸石丸ともいいます。東西に長く伸びた広い曲輪で、南側3m下に帯曲輪が広がっています。帯曲輪には、素掘りの井戸と石積が見られ、その下がトヤノ段です。二ノ丸の西南側には、階段状の曲輪があって、その先には虎口があります。

⑨-1 北ノ丸（標高184.4m）

北ノ丸の登り道、左側に素掘りの井戸があります。北ノ丸は、高山城跡の中で1・2番目の広さです。西側の一角に石積みが南北に伸びている微高地（標高184.5m）があります。地元の伝承によりますと、建造物があったそうです。西側の下に続く曲輪が3段あり、船木に降りる道がありました。

⑨-2 虎口（こぐち 標高175m）

北ノ丸から南へ下る道を進むと、削り取られた溝のような所が虎口です。虎口とは「小口」で狭い入り口のことです。敵が攻めて来た時入り口が急に狭くなるので、一時的に踏みとどまっている時に、上から攻撃に移る防御施設です。

（ここで、高山城跡見学会の解説は終了し、全員怪我なく14：00に下山しました）





三原のお祭り



沼田(淳田)神社 湯立祭

沼田^{ぬた}神社は三原市沼田東町本市祇園面に鎮座まします。
この神社の恒例の湯立祭は旧暦2月初めの卯の日と定められていましたが、
現在ではその日に近い陽暦3月初めの日曜日と定めて行われています。

1. 沼田神社の由来と湯立祭の縁起

淳田^{ぬた}とは海を埋めて田とした所をいい、この淳田に真人^{まひと}という人が居り、神の教えに従い疫病除けの社を造り斎祭^{いっさい}ったのが淳田神社(祇園牛頭天王社)創建の由来といわれています。

元治元(1864)年5月2日には神位正一位に叙す宣旨が下され、明治元(1868)年に郷社に列し、同40(1907)年2月1日に神饌幣帛料供進社の指定を受けました。

(ウイキペディア百科辞典 沼田神社から)

我々人間は火を発見し、使用することを覚えた

ことにより文化が進んできました。人間には大切な要素根源が三つあり火、水、風であります。

湯立祭は、それを清浄にし、上手に使い感謝する心を神に供え幸福祈願をする祭りであります。(沼田神社 湯立祭 から)

沼田神社には日毎に参詣者が多くなり、門前市をなし沼田市として中世に栄えました。



〔 沼田神社 〕

2. 沼田市の歴史

沼田市の名が初めて文献に出たのは鎌倉末期の応長2(1312)年の事ですがそれ以前、清和天皇の頃、勅使日良麿公が淳田神社に祈誓あり、朱雀院の頃、鶴山城主藤原倫実公が祈願して居るので、沼田氏の時代、すでに沼田市が形成されていたと思われます。

中世武士団のひとつ、小早川公戦運を当社へ祈られ心願のしるし勝利あり 以来小早川氏と盛衰を共にした沼田市です。

小早川第四代茂平公が嘉禎4(1238)年、念仏堂を建立し塩入荒野を開拓し初めてから第9代春平公は応永4(1397)年に佛通寺を創建し、翌年に塩入新田(沼田千町田)を竣工しました。実に160年かかっています。

又沼田市は小早川氏が海上に勢力をのばす根拠地的存在にあったのです。第十代則平公は朝鮮及び南洋へも進出し貿易港としていました。実に沼田市は沼田荘の経済の拠点として在家三百戸が建ちならび富裕商人が多く商業集落として他にあまり例を見ないほどの繁栄ぶりが文献資料に見えています。(以上、沼田東町本市町内会看板から)

3. 湯立祭

沼田神社本殿前に注連縄を張り巡らし、各四隅に青龍(東)・朱雀(南)・白虎(西)・玄武(北)を配し、祭壇を設け、背後に風・水・火の釜三個が据えてあります。神主が湯立祭式辞に従い、祓いの行事の後、本殿より御神火を移し点火して、大祓いの奏上、御神刀の由来を奏上し剣の祓い祝詞奏上、五穀成就、家内安全、病魔退散、交通安全祈願の祭りです。



〔御神火採火〕

竹の枝は牛馬に食ませて
牛馬の安全を祈ります。

釜の湯は各方々に持ち帰り
夏中飲み、無病息災を護
りくださる神護ありと言わ
れています。

水は清浄に見えても、火
の神の力で燃やして、最も
清浄に滾る時、壺に汲み、



〔御神刀之祓い〕



〔初湯奉納〕

神前に供し、人の真心を供
えて、1年中の大願成就の
祈願をします。

また、湯を笹の葉に移し、
このしぶきを受けた人は無
病の靈験があると言われて
います。



〔初湯禊祓い〕



いとも古式的神秘的な神
事です。

当社は、沼田郡一の郷社であるため、特に近郊の崇敬も篤い宮で、素嵯鳴命は疫病退散、五穀成就、海上安全守護の神様で古来、忠海、大三島外、島嶼部の人々の信仰も厚く祇園講も現存しています。

なお、この祭りは当神社の大祭に次ぐ大事な祭りだそうです。

湯立祭式辞

- | | |
|-------------------|---------------|
| 1 修祓 | 2 降臨之儀 |
| 3 大麻祓い | 4 献饌 |
| 5 御神火採火 | 6 大祓奏上 |
| 7 祝詞奏上 | 8 御釜之祓い |
| 9 御神刀祓い祝詞 | 10 御神刀之祓い |
| 11 初湯奉納 | 12 初湯禊祓い(斎竹笹) |
| 13 玉串奉奠(祭主 楽人 氏子) | 14 昇神之儀 |
| 15 閉式の辞 | 16 直会 |
| 17 神楽奉納 | |

石碑が語る三原の歴史

今回は三原市北東方面、尾道との市境に位置する篝地区を訪ねました。この地は北上する芦田川の支流御調川に沿ってわずかに開けた谷間の村で、江戸期には三原浅野の給地でした。明治になり御調郡篝村となり戸長役場が置かれ、明治22(1889)年、町村制施行で御調郡八幡村大字篝となり、昭和28(1953)年三原市に編入、八幡町大字篝となりました。

古くは「加加利」「かゞり」とも表記されていたようですが、その昔、急峻な溪谷沿いに道がなかった頃、垣内から山道をたどる旧道があり、平野部の開ける手前の山に、人の動きを見張る勘定丸という砦があり、篝火をたいていたとか…地名の由来を想像するのも楽しいものです。

道 標



高楠順次郎先生顕彰碑入口
これより一キロ米
史跡 沢井図書館

県道25号三原東城線から国道486号線御調八幡宮方面へ東進、しばらく行くと北に向かう県道406号宇津戸八幡線の分岐点、三叉路の西側に建っています。昭和63(1988)年11月に完成した御調ダムの工事用道路として昭和53(1978)年改修拡幅された際に地元の方々の篤い思いで建てられた道標です。これから1200m激しく曲流する篝溪谷に沿って北上します。

平野部が開く手前、立派な建物があります。かつて「マザー文庫」と呼ばれた山際満寿一氏の「照隅人日草堂」の建物です。氏は読書せよとの母の教えをよく守り刻苦勉勵、満州で軍の資源確保の仕事につき、戦後は放送事業の開設に専心、放送事業免許第1号獲得、読売テレビ、広島テレビの創業経営に参画。その傍ら読了蔵書1万数千冊をもって、亡母縁の自然豊かなこの地に別荘を建て一般に開放されたそうです。40年位前、篝溪谷のせせらぎを聞きながら素敵な別荘で本を読んだ記憶があります。

現在は残念ながら閉鎖、縁の方の手によってなんとか維持管理されているようです。

[篝分れの道標]

横	27.5 cm
幅	15.5 cm
高さ	172 cm



[照隅人日草堂 全景]



[照隅人日草堂]

句碑・詩碑



あさな夕な仰ぎても
みむ里の子ら 他山に
ほこれ このいしづみを
連

幅 150 cm
厚さ 50 cm
高さ 110 cm

[高楠順次郎先生顕彰碑建立のとき詠める]

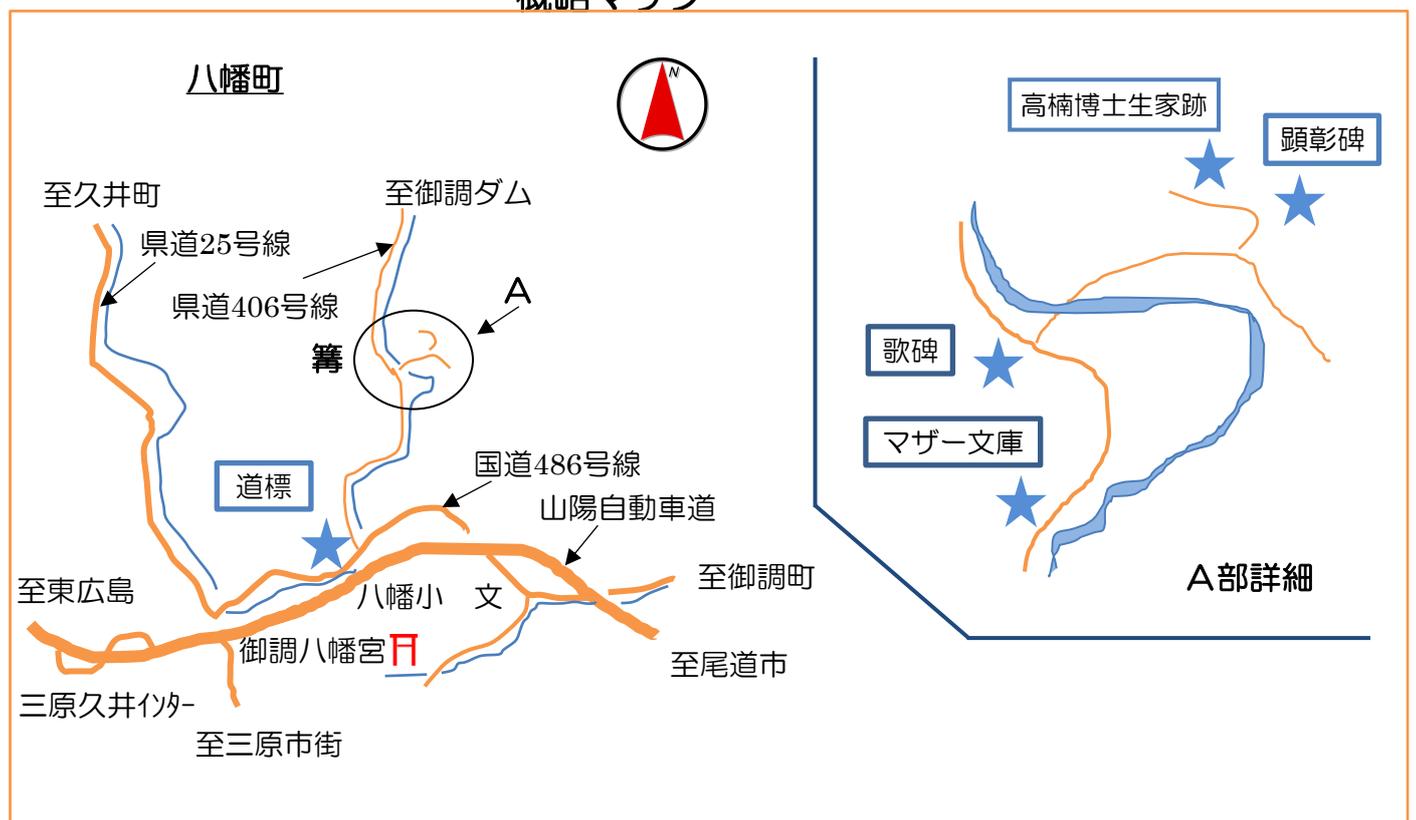
この歌碑は406号線のほとり、御調川を隔てて高楠順次郎先生顕彰碑を見上げる場所に建っています。宇津戸八幡線改修拡幅の折に有志の方々によって昭和53(1978)年に建てられたものです。

始めに[高楠順次郎先生顕彰碑建立のとき詠める]と詞書が刻まれています。発起人に名を連ねる三原保勝會会長小林連氏が詠まれたものです。

この篝溪谷沿いの30戸にも満たない狭溢な村から出た偉人に驚き、誇りに思ったことでしょう。

振り仰ぎみれば長閑な山里の佇まい、営々として棚田を守る人々、悠久の時の流れの中に、昔日の面影をかすかに残した沢井家屋敷跡や顕彰碑が早い夕日に照らされているばかりです。多少の温度差というか風化感を感じながら川を渡ります。

概略マップ



記念碑



[表面]



[裏面]

[高楠順次郎先生顕彰碑]

自然石

幅 150 cm

厚さ 30 cm

高さ 212 cm



[高楠順次郎先生顕彰碑と朽ちる生家]

高楠順次郎博士

(1866-1945)

この碑は昭和35(1960)年、門弟知人、市内有志により建てられた顕彰碑です。高楠順次郎博士の業績がびっしりと刻まれています。郷土が生んだ梵文学の大家、故高楠順次郎博士は幼少より四書五経を習い、15歳で宮内小学校の教師を振り出しに教員生活を送り、縁あって神戸の裕福な高楠家の養子となり、後、オックスフォード大学に学び梵文学インド哲学比較宗教学など研鑽をつみ各国から学位を送られる。東京帝国大学教授東京外国語学校長を歴任、35歳の時文学博士、後に武蔵野女子学院を創設。

「大正新修大蔵経百巻」は大事業であり文化史上不滅の業績。昭和19(1944)年文化勲章、昭和20(1945)年79歳で死去。

(三原市広報昭和35年10月25日166号より抜粋)

この顕彰碑の裏にはかつて書庫があり「沢井図書館」となっていました。利用者が限られることからやがて蔵書は八幡小学校に移り、そして三原図書館へと移行します。高楠順次郎博士の実弟沢井常四郎氏は教師を退職後三原本町に住み、館町(三原小学校南に記念碑)に私設図書館を開設、現在の三原市立中央図書館の礎を築かれました。

沢井家は明治中期には稀であった瓦葺二階建ての家で昭和54(1979)年に発行された宮本常一監修「三原市の民家」の中にも収録されている立派な屋敷でした。戦時中は、神戸高楠家の縁者の人々が沢井家を頼って疎開され、当主、雪枝さんはその食を賄うために大変な苦勞をされていたようだ、と農作業をされていた方から聞きました。その最後の当主、沢井雪枝さんを失った家は、まるで、この天才を世に出すことで役目を終えたかのように、ある日突然に崩落したそうです。

現在は縁者の方も遠方のため、ご近所の方が草刈りをしたり残骸を片づけたりして下さっているようです。

寂しさ儚さ、索漠たる思いにとらわれます。



三原にある狛犬



今回は、鷺浦地区の狛犬を紹介します。（神社の由緒説明文は広島県神社誌による）

36. 小浦八幡宮

三原市鷺浦町須波835

天正9(1581)年 因島村上家の代官、村上与市兵衛直盛が宇佐八幡宮の御分霊を勧請。
享保12(1727)年 大火。翌13年再建と伝わります。



	(単位：cm)		
	高さ	幅	奥行
阿形	77	32	52
吽形	80	29	59
年代	文政7(1824)年8月		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	お座り型		



37. 比呂神社（通称 広明神様）

三原市鷺浦町須波1954

貞観4(862)年 摂津国広の豪族、広安友が南海の海賊討伐の勅令を受け、備後国鞆津辺まで来た頃より、船内で疫病が多発し、軍船を鷺の泊に入れ休養した時、広家先祖の靈威と阿弥陀三尊を祀り戦勝祈願したことに依り起これる神社と言います。

〔 境内社殿横には、樹齢500年、幹周り5mもあるような大楠のご神木がそびえておりました。また、残念ことに、阿形狛犬の鼻柱と上顎が欠損しておりました。 〕



	(単位：cm)		
	高さ	幅	奥行
阿形	70	26	52
吽形	68	30	51
年代	不明		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	お座り型		



38. 恵美須神社（通称 えべっさん）

三原市鷺浦町向田野浦4916

須ノ上の沖合いで漁民が不思議な靈威に会い、帰って人々に話す。向田神主、丸山權之助年詣が願主となり、文明2(1470)年 出雲国の美保神社より須ノ上生石山に勧請したと言います。



	(単位：cm)		
	高さ	幅	奥行
阿形	71	33	52
吽形	76	35	55
年代	不明		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	お座り型		

